無理やり書いてもらった『私の履歴書』

山岸一平

昭和三十五年七月、池田内閣が誕生することになり大平先生が内閣官房長官に内定しました。その年の三月に大学を出たばかりの全くの駆け出し政治記者だった私は、当時、先生が住んでおられた駒込団子坂の私邸をたずねました。このときゴルフ帰りの田舎のオッサン風の謦咳に接したのが、その後二十年間、親しくお付き合いをさせていただいた大平先生との出会いであります。

このすぐ後、朝刊扱いになっていた池田首相と内閣記者会との初めての記者会見を、当時の田中六助デスク（現通産相）が勇み足（？）で夕刊にぶちこんでしまい、日経は首相官邸クラブから一時除名となりました。復帰までの一カ月余、官房長官秘書官室が私達の職場となり、大平長官は日に三度の記者会見を日経のためにそのつどやり直してくれました。

それ以後の二十年間、先生との思い出はつきません。最後にお会いしたのは逝去される約一カ月前、自民党の政経文化パーティー出席のため来名した先生は私や家族のことを気にかけてくださいました。長いお付き合いでしたが、特別の大持ダネをもらったという記憶はありません。政治家と政治記者という関係ではなく、人間大平正芳先生から多くのことを学びました。ある時は大臣室で、ある時は私邸でおりにふれて聞かされた〝大平哲学〟は私の血となり肉となり、人生の糧となっています。

五十三年元旦から三十回、大平先生の「私の履歴書」が日経の文化欄に連載されました。四国の片田舎に生ま

れ、苦学力行、起伏の多い人生行路、日本ではきわめてめずらしい哲学を持った政治家として是非とも登場させたい人物でした。ところが私の再三の依頼に対して「そのうち書くよ」と言うだけで、なかなか確答が得られませんでした。やむを得ず五十二年の秋、「毎年、元旦からは大物に書いてもらうことになっており、来年は大平先生と決めて空けてあります」と一方的に最後通告しました。

「君は強引だねぇー」とおっしゃって引き受けてくださいましたが、筆の立つ先生のこと、執筆、校正等すべてご自身でなさいました。ゲラ刷りを持参すると、どんな深夜でもにこにこしながら「ぼくはこういうことが好きなんだよ」と言いながら赤字を入れられました。そこには政治家ではなく、文人大平の姿しかありませんでした。

休日も返上して執筆に当てていただきましたが、当時は自民党幹事長の激職にあり、年末には予算編成にぶつかり原稿がとどこおってしまいました。そこで、奥様やご家族のかたがた等にお願いして元旦の夕方から三日間、先生を川奈ホテルに〝かん詰め〟にして出稿を急いでいただいたことも今では懐かしい思い出です。

先生の履歴書は「政治家が書いたものの白眉」として大変に好評でした。各方面からの強い希望もあり、すぐに単行本として出版しましたが、「君に無理やり書かされたが、ぼくを知ってくれる材料にはなったようだね」と喜んでくださいました。

昨年十一月、志げ子夫人が来名され、私と日本碍子の竹見淳一社長（大平夫人と森村学園時代の学友）がお伴して岐阜県多治見市の加藤卓男先生の窯をたずねました。晩秋の美濃山中で志野焼の手ほどきを受けながら、思わず「首相の激務から解放された大平先生をここにお連れしたかったですね」という言葉が口をついてしまいました。相槌を打っていただいた奥様の隣に、あの温和な大平先生の笑顔が浮かび、目頭が熱くなるのを禁じえませんでした。

（日本経済新聞名古屋支社報道部長）